慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本の書物文化を世界に発信する
Sub Title	
Author	佐々木, 孝浩(Sasaki, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.7, No.1 (2020. 3) ,p.10- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 DMC研究センターシンポジウム第9回「大学教育のミライ： オープンエデュケーションのその先へ」これからのMOOCの話をしよう 開催日時：2019年11月20日 (水) 14:00〜19:00 開催場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2F大会議室 講演1 グローバルMOOCの経験から
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000007-0010

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講演 1　グローバル MOOC の経験から

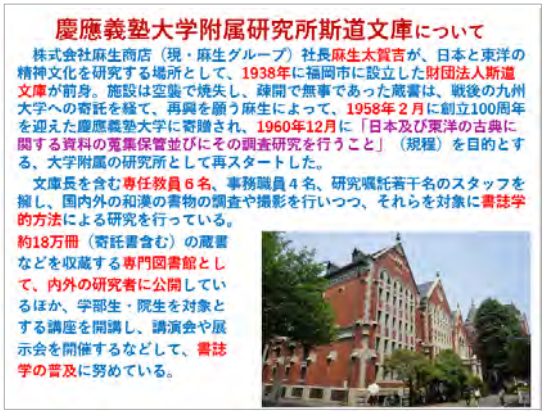
日本の書物文化を世界に発信する

佐々木　孝浩

（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫・文庫長）

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、慶應義塾大学附属研究所、斯道文庫の文庫長をしております佐々木孝浩と申します。少々異質な人間が 1 人混じっている感じなのですが、お話しさせていただきたいと思います。

まず、ごく簡単に斯道文庫の説明をいたします。慶應義塾にございまして、漢字を使った国々の書物を研究する、日本国内でも大変珍しい研究所でございまして、専任教員が 6 名おります。漢字を使っていた国々の書物が約 18 万冊ございまして、書物研究を行っている所でございます。書誌学という学問を専門にする研究所なのですが、正直 10 年ぐらい前までは、もう滅びるのではないかという不安がございまして、本当に、古臭いと思われていた学問だったのです。デジタル技術の進展とともに書誌学という



学問が再びスポットを浴びてくるようになり、さらに最近の MOOC とうまい具合にいい関係を結べたことによって、何か全く新しい世界が広まったという感激にあふれている者として、お話しさせていただきたいと思います。

まず、先ほど大川先生からご案内がありましたが、慶應義塾が FutureLearn のパートナーになってコースを作らなければならないという話になりましたときに、日本で FutureLearn のパートナーになった最初の大学として、日本に関係するコースがよいだろうということになりました。慶應義塾の文学部をはじめとする日本の研究をしている先生方が何人か集められまして、松田先生を座長として会議が開かれたと記憶しております。2015 年のことでした。そのときに私も呼んでいただきまして、誰がやるかというような感じでしたが、私は、自分で手を挙げて「やります」と申し上げて、最初にやらせていただきました。これは一番槍に意味があるだろうと思ったからで、戦争ではないのですが、先駆けというのが

大事だろうと思ったからです。それは全く何の成算もないところからではなく、実はそれまでの経験で成算があったというのがあります。

その成算というのは、書誌学研究のために何度も海外に行っておりましたが、日本の書物というのは美術的価値がありますので、海外にも多く所蔵されております。それらを調査するために伺って見せていただいていたのですが、ただ自分だけが分かっていても仕方がないので、持っている方にも理解していただきたい、一緒に学びたいという思いがありました。そういう方々にレクチャーのようなものが必要なのではないかと思っていたのです。また、インターネットの普及とデジタル技術の発展で、海外のいろいろな大学図書館が、自分の所にある古典籍を高精細画像で公開するということが流行になっておりまして、日本の古典籍などもたくさん公開されているのですが、それを本当に理解している人はやはり少ないというような問題などもありました。それで調査に伺った際に時間をつくって、調査した先でレクチャーのようなことをさせていただいたりしていたのですが、その反応がとても良かったのです。それでこの内容をコースにすれば、結構いけるのではないかというようなことを思っていたわけです。まず最初にプリンストン大学に押し掛

最初のコース公開まで

Futurelearnのパートナーとなって最初のプログラムは、やはり日本文化を紹介するコースがよいということになり、文学部の教員数名と研究所の教員2名が説明会に招集された。

コース内容に関してある程度の成算があったのと、いつか担当せざるを得ないならば、一番槍に意味があると考え立候補した。

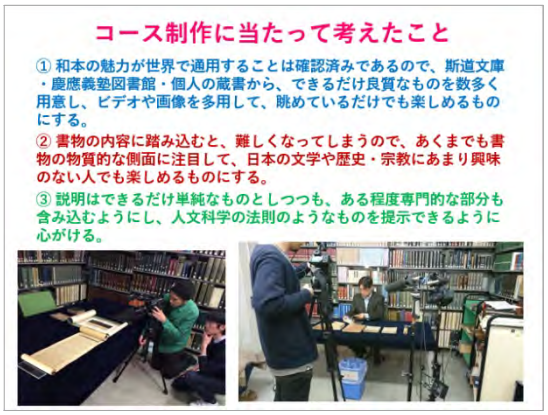
「成算」とは：①書誌学研究の為に何度も海外出張をした経験から、欧米の美術館や大学の図書館などに、日本の古典籍が少なからず存在しており、それを理解したいと欲している研究者やライブラリアン・キュレーターが少なくないこと知っていた。②インターネットの普及とデジタル技術の発達に伴い、インターネットで日本古典籍の精彩カラー画像が公開されており、日本文化に興味のある人ならば、ネット環境さえあれば、そうした情報に容易に接することが可能な時代になっていることを感じていた。③海外での複数回のレクチャー経験があった。

けていき、知り合いに授業を 1 回分譲ってもらい、3 時間のレクチャーをしました。そこにライブラリアンの方が出ておられ、面白かったから我々の会でもやって欲しいということで、シカゴでやり、それからあちこちから声を掛けていただきました。そういうことがありましたので、本当にこの内容でいけば大丈夫だろうと思ったわけです。

2014年3月プリンストン大学押売り講義

プリンストン大学に就職した若いアメリカの友人を頼り、同大学の和本を調査に行った際に、こちらからお願いして、友人の大学院の授業を１回分3時間をもらい、「和本入門」の講義を行う。東アジア図書館の中国書と日本書担当の研究ライブラリアンも出席。

コース制作にあたって考えたことなのですが、和本の魅力が世界に通用するというのは、経験を通して確認済みであったので、本自体は斯道文庫や慶應義塾図書館、また個人の蔵書から、美しいものをできるだけたくさん選んで、画像を通して見ていただければ、その画像を見るだけでも楽しんでもらえるだろうということがまず一つ。次に、あまり内容のことに踏み込み過ぎると、専門的になって難しくなってしまうので、今、海外でも流行っているマテリアルカルチャーというか、物質に焦点を当てて、本という物に注目してもらうような作りにし、なおかつ併せて日本の文学や歴史、宗教などに興味のない人でも楽しめるような、日本の文化を何となく分かってもらえるようなコース作りをしようと考えました。しかしながら、説明はできるだけ単純なものとしつつも、ある程度の専門的な部分も含んで、知的好奇心をくすぐりながら楽しんでいただけるようにし、なおかつ人文科学の法則のようなものも提示できるような内容になることを、制作するにあたり心掛けました。



ラッキーだったことに、まず先ほども申し上げましたが、本がとにかくたくさんあるので、これを自由に使えるということがあります。そして斯道文庫には 6 人も教員がおりますから、書物を専門とする同僚たちを巻き込むということができました。そしてなんと言っても、大川先生をはじめとするメンバーがいらっしゃらなかったら、とても出来上がらなかったことなので、本当に内容だけではどうにもならない部分をカバーしていただいて感謝しております。宮北さんにも大変にお世話になりました。また、慶應義塾大学出版会の安井さんによる強力なサポートがあり、本当にすごく総合力が必要だと思いました。そういうものが

MOOC のコースなのだというのを実感しております。それからお恥ずかしい話ですが、日本のことをずっとやってまいりましたので、あまり語学が得意ではありませんが、やはり海外で公開するためには英語を基本にして発信する必要があるわけです。われわれの若干専門性のある日本語のテキストやビデオで話していることを、英訳していただく必要がありまして、それを誰にお願いすればいいのかと思っていたときに、旧知のジャン・ピエーロ・ペルシアーニさんという、現在イリノイ州立大学の先生をしておられる方ですが、ちょうど日本に滞在しておられて、この方に翻訳をお願いすることができました。知り合いの方からも「とてもいい英訳だ」とお褒めいただき、彼のおかげで

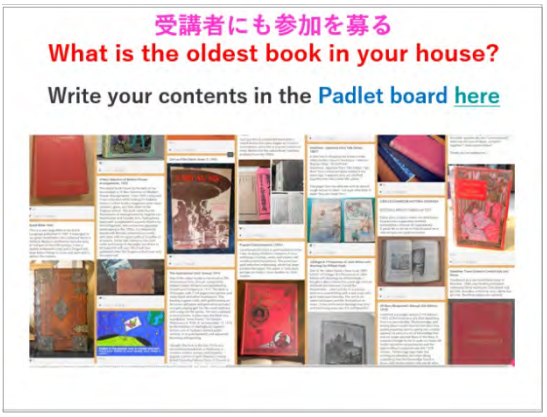
あると感謝しております。

2016 年から開講することができまして、まず宣伝用のトレーラービデオが FutureLearn を通して配信されることになりました。これについては、さすがに「英語で話せ」と言われまして、後方でビデオが流れているのが本当に心苦しくて仕方がないのですが、拙い英語でお話しさせていただきました。しかも知らないうちに、許可は取られてないと思うのですが YouTube に流されたりして、「YouTuber になった」と知人に言われました。ただ、再生回数が少な過ぎてそれがまた心苦しいのですが・・・。

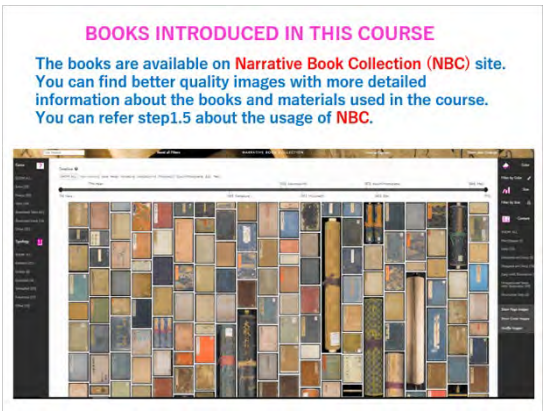
やはり飽きないように勉強をしてもらうのは大変大事なことですので、コースの組み立てが Article、Video、Quiz、Discussion という 4 つの部分からなっているのですが、それぞれを大川先生の提案どおりに、組み立てをいろいろ考えてやりました。クイズを考えたり、ビデオとテキストの配分を考えたりするのが難しかったです。私は、本は静止画で見るよりも動画で見たほうが立体感とか存在感を得られるので、できるだ

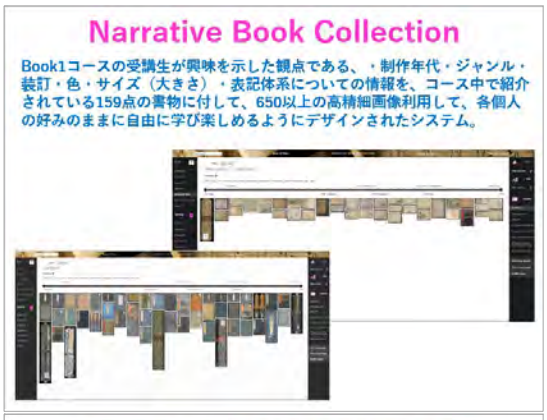
けビデオを多用しました。別に出たがりということではなくて、とにかく手元を映していただく形で、アップでいろいろな書物をめくったり巻いたりしまして、そういうところが非常に反応が良かったです。また、英語と日本語のテキストを pdf でダウンロードして、さらにビデオもダウンロードできますから、実はネットを使わなくても勉強できる環境が提供されているのです。実際、海外の知人の先生は、それをダウンロードして授業で使ってくださっていました。

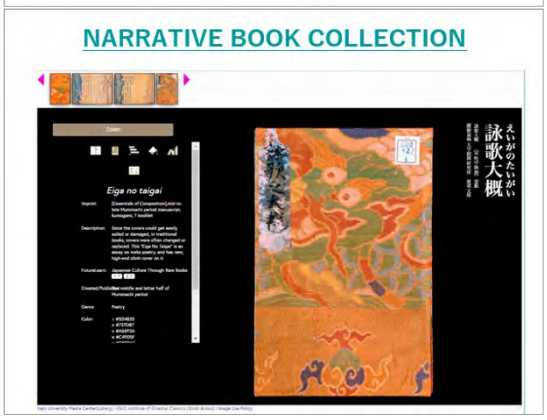
それから受講者にも参加を募るということで、特に私のやりましたのは書物のコースですから、「あなたの家にある最も古い本は何ですか」という、これも大川先生のサジェスチョンだったのですが、そういうことを聞きました。みなさん、うちにこんな本があると言って、それを写真に撮ってアップしてみんなで見せっこするようなサイトも作っていただいて、全世界から本当にすごい本がたくさん集まって盛り上がりました。



また、コースで扱っている書物をさらに拡大して、具体的に見ることができる NBC というものを宮北さんが開発してくださって、後ろでもデモンストレーションがありますが、年代、表紙の色、形態、内容によって順番を変えたり、自分の気に入ったものを取り出して見たり、自由に並べ替えをしたりできるようになりました。「この本をもっとクローズアップしてみたいな」と言うと、拡大されて大迫力の本になったりするわけです。また、ビデオも対話形式や出張撮







影などもあり、和本ですから神保町のお店に出掛けて店頭で撮影させていただいたり、最後の締めは和室で正座して日本らしさを出したりしました。ここは、慶應横浜初等部という小学校の茶室を借りて、そこまで出張して撮影いたしました。それから先ほども申し上げましたように、ビデオを多用してできるだけ物に語らせるということもいたしました。

登録者数は先ほど出ましたが、第 6 回目までのデータで、166 カ国 2 万 1477 人の登録者を得て、国別でも、FutureLearn はどうしても本部のあるイギリスが強いというのがありますが、結構いろいろな国々から参加がありました。

リージョン	登録者数 (%)
ヨーロッパ	10,440 (48.6%)
アジア	4,576 (21.3%)
北米	3,836 (17.9%)
南米	949 (4.4%)
オーストラリア	828 (3.9%)
アフリカ	506 (2.4%)
不明	342 (1.6%)

順位	国名	順位	国名
1	イギリス	12	ブラジル
2	アメリカ合衆国	13	インド
3	日本	14	ベトナム
4	オーストラリア	—	不明
5	ロシア	15	オランダ
6	イタリア	16	中国
7	メキシコ	17	ウクライナ
8	スペイン	18	シンガポール
9	カナダ	19	フィリピン
10	フランス	20	ポリシュ

それなりに多くの方に登録していただいて評判も良かったので、当初からの計画でもあったのですが、兄弟のコースというこ

とで斯道文庫の中国系の書物を専門にしている人たちに加わっていただいて、二つ目のコースを作りました。さらにもう一つと

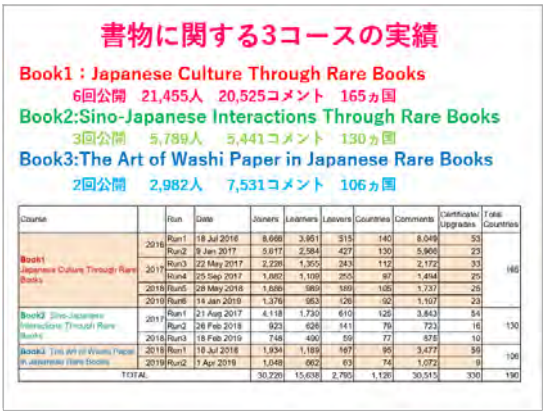
いうことで和紙の研究をしている後輩を巻き込みまして、和紙に関するコースも作りました。こちらも日本橋にある和紙問屋さんに出掛けたり、埼玉県の紙透工房で撮影したりいたしました。ただ本に比べると一

般性が薄いところもありまして、受講者数は最初のコースよりは少ないです。それで

リージョン	登録者数 (%)
ヨーロッパ	1,620 (53.8%)
北米	565 (18.8%)
アジア	432 (14.3%)
オーストラリア	171 (5.7%)
南米	112 (3.7%)
不明	62 (2.1%)
アフリカ	49 (1.6%)

順位	国名	順位	国名
1	イギリス	11	ベリジャ
2	アメリカ	12	ロシア
3	日本	13	オランダ
4	オーストラリア	14	ブラジル
5	カナダ	15	インド
6	イタリア	16	アイルランド
7	フランス	17	ポーランド
8	スペイン	18	ニュージーランド
9	ドイツ	19	中国
10	メキシコ	20	スイス

も、結構熱心な登録者さんが参加してくださり、それなりに盛り上がっているところでございます。書物に関する三つのコースの実績ですが、このようになっております。



Course		Run	Date	Joiners	Learners	Leavers	Countries	Comments	Certificates/ Upgrades	Total Countries
Book1 Japanese Culture Through Rare Books	2016	Run1	18 Jul 2016	8,668	3,951	515	140	8,049	53	165
		Run2	9 Jan 2017	5,617	2,584	427	130	5,906	23	
	2017	Run3	22 May 2017	2,226	1,355	243	112	2,172	33	
		Run4	25 Sep 2017	1,662	1,108	255	97	1,494	25	
	2018	Run5	28 May 2018	1,686	989	169	105	1,737	26	
	2019	Run6	14 Jan 2019	1,376	953	126	92	1,107	23	
Book2 Sino-Japanese Interactions Through Rare Books	2017	Run1	21 Aug 2017	4,118	1,730	610	125	3,843	54	130
		Run2	26 Feb 2018	923	628	141	79	723	16	
	2018	Run3	18 Feb 2019	748	490	59	77	678	10	
Book3 The Art of Washi Paper in Japanese Rare Books	2018	Run1	18 Jul 2018	1,934	1,189	167	95	3,477	59	106
	2019	Run2	1 Apr 2019	1,048	862	63	74	1,072	9	
TOTAL				30,226	15,638	2,780	1,126	30,515	330	190

今回のテーマである今後のことに関して、最後に時間かけてお話ししたいのですが、コースを開発した私の感想ですが、これは結構いけるだろうという予想が当たり、ほ

っとしたのですが、やはりマーケティングとまではいきませんが、実体験、事前調査を基にして構想する大切さをあらためて感じました。

それから私の立場からすると、日本の伝統文化とその産物は、日本の貴重な資源であることを再認識することができて、それを守りながら効率よく活用していくことの必要性を痛感しています。やはり日本の古典研究はどんどん尻すぼみになっていますので、物を使うことによって、もう一度盛り上げたいという気持ちがあります。それから日本文化を直接対象としなくても、日本の書物のデザインやコンセプトはさまざまな場面で応用可能なものだろうと思っています。

また、コース終了部分のコメントに世界中から感謝の言葉が寄せられました。「Thank you, professor Sasaki」というのが、最初のコースが終わったときに、一体、何件、書き込みがあっただろうと。私、生きてきてこんなに人から感謝されたことはないと、非常に幸せを感じまして、やってよかったと思いました。本当に仕事のやりがいを感じたというのが正直なところです。

それからチームでなければできないことがあると。よく映画の封切りのときに出演していた俳優が、チームでできて感謝しますというようなこと言っていますが、あれは心底、心から思って言っているのだなというのが実感できました。本当にいいチームワークがないと、いいものはできないということを痛感しているところです。

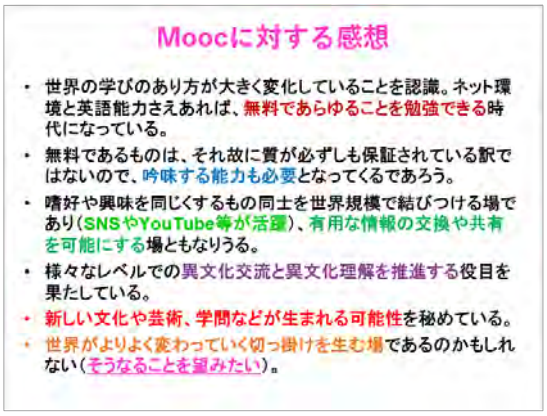
それから FutureLearn の特色は、他もそうかもしれませんが、コメントを受講者が自由に書き込むことで、お互いに学んだり、私たちが返事をしたりすることができる期間を設定しています。最初のときは 8000 ぐらいコメントがあって、全て英語なので読むのが大変で、とても全部にはお答えができなかったのですが、それを読んでいくと、本当に日本人が全然思いつかないような意見や質問が寄せられていて、異文化交流というのは大事なのだなというのが、実感できました。特にこういうことは、これからの日本人にとって必要な経験なのではないかと思っています。

コース公開後の感想

- 予想が当たったことにほっとすると共に、実体験（事前調査）を基にして構想する大切さを改めて感じた。
- 日本の伝統文化とその産物は、日本の貴重な資源であることを再認識すると共に、それを守りながら効率良く活用していくことの必要性を痛感した。（日本文化を直接対象としなくても、デザインやコンセプトは様々な場面で応用可能なはずである。）
- コース終了部分のコメントに世界中から感謝の言葉が寄せられて感激した。これが本当の仕事のやり甲斐なんだと感じた。
- チームでなければできないことがあることを再認識し、チームワークというものの大切さを改めて実感した。
- 想定していない角度からの質問が多数寄せられ、異文化交流というものを実感した。日本人には特に必要な経験であろう。
- 制作・公開を通じて成長できた実感。挑戦することの大切さ。
- 日本はまだまだ世界に対するアピールが足りないし、その方法の検討も不十分である。自覚と自信を持って、正しい模索をすれば、必ず世界で活躍できるはずである。
- それにつけても必要なのは、情報伝達ツールとしての英語の能力である。

そして、MOOC に対する感想なのですが、やはり MOOC によって世界の学びの在り方が大きく変化していることを痛感したというのがあります。ネット環境と英語能力さえあれば、無料で何でも勉強できる時代が既に登場していますし、無料であるのです

から、質が保証されるわけでもありませんので、吟味する能力も必要になっていると感じました。それから嗜好や趣味を同じくする者同士を、世界規模で結び付ける場であり、SNS や YouTube なども活用して、お互いに紹介し合ったりするような情報交換や知識共有を可能にする場になっている、というのも大変大きな意味だろうと思います。そして、様々なレベルでの異文化交流と異文化理解を推進する役目を果たしていることになりますし、また、こういうことを通じて新しい文化や芸術、学問が生まれる可能性すら秘めているのではないかと、実際に本気で思っています。世界がより良く変わっていくきっかけの場になってほしいとも思っています。私は MOOC の制作に関係して、



先ほど「人生が変わった」と言いましたら、「何を大げさな」と笑われたのですが、本当にすごく恩恵を被っています。世界中のいろいろな学会などに出掛けますが、たいがい受講者の方がいて挨拶してくださいます。「うちにも来てくれる？」と言っていただいて、最近もあちこちに呼んでいただいています。やったことがプラスでしかない、プラスばかりの状態です。最近も、新しいコースを作成中ですが、ぜひ多くの大学でコースをたくさん作っていただいて、MOOC 効果というようなものを実感していただきたいと思います。

少々急ぎ足でしたが、これで終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。